

2020年9月13日 佐土原教会礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書11章45～57節
説教題：信仰を守る視点

カナダの教会で奉仕をしている時—ちょうど、私がディプレッション(急性鬱症)で入院して、退院した頃のことです—カウンセラーをしている兄弟が、証し会でこんな話をしてくれました。「ディプレッションというのは、私達の見ればあつては困るもの、そう見えます。しかし神様の目から見たらどうなのでしょう。全てのことは神様の御手の中にあります。ディプレッションもまた、神様の理由があるのではないのでしょうか。楽しみよりも、苦しみの中に神の栄光は現れるのではないのでしょうか」。私にとっても、ディプレッションで入院したことは、神を経験させて頂く機会になりました。彼の言ったことに頷いたことです。先日も教会からのレターで「神は悪からでさえ、善を生み出して下さる」というベサニー・ハミルトンさんの言葉をご紹介しましたが、いずれにしても、私達を導いて下さる神様を、自分の頭の中で小さくしてはいけない、神の大きさを信じること、そこに信仰生活への励ましの1つがあるような気がするのです。

今日の箇所は、ラザロがよみがえった後の記事になります。結論から言うと、「ラザロのよみがえり」が権力者を刺激して、彼らにイエスを殺す計画を公に決断させることとなります。この箇所は、その様子を伝えますが、それだけではなくて、この箇所は「私達は信仰を守るために何に目を向けなければならぬか、何が私達の信仰を支え、励ますのか」、そういうことを教えてくれる個所だと思います。2つのことを申し上げます。

1：神の救いの原点に戻る

ラザロのよみがえり、死んで4日も経った人がよみがえったという、驚くような出来事を見た多くの人々が恐らく「こんなことが普通に起こるはずがない、神が働かれたに違いない」と思ったのではないのでしょうか。45節に「イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた」(45)とあります。この時、エルサレムは、イエスに敵対する雰囲気には包まれていました。しかし、そのエルサレムからやって来た人々も、この出来事を見てイエスを認めざるを得なかったし、既にイエスに惹かれていた人々は、確信を与えられたと思います。一方「ラザロのよみがえり」のニュースを受け取ったパリサイ人は、祭司長達の所に行きます。パリサイ人は、ユダヤ議会に議席は持っていましたが、いわば野党でした。権力は、祭司階級であるサドカイ人が持っていて、そのトップに大祭司がいました。彼らは「もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる」(48)と言っています。当時のユダヤ社会は、ローマ帝国の支配下、ローマに許された範囲内で大祭司と議会が権力を振るっていました。ローマは、支配地域に対して比較的寛大な政策を取っていましたが、暴動だけは赦しません。暴動が起これば、軍隊が出て来て騒ぎを鎮圧して、自治の責任者である祭司階級、特に大祭司は、その立場を追われるのです。サドカイ人が何よりも恐れたのが、ローマがやって来て、自分達が権力の座を失うことでした。彼らは、人々がイエスを反ローマ運動の指導者に祭り上げ、暴動でも起こしたら困るのです。これまで

サドカイ人は、イエスの動きにほとんど関心を示しませんでした。ここに来て、自分達の利害に直接の関りが出て来た時、不安の芽になっているイエスを摘み取ろうとするのです。一方、パリサイ人は、信仰のリーダーとして自分達の教えを国民に徹底させることが出来れば、それで良かったのです。しかし、そのためには、ローマに直接支配されることは困りました。何より自分達の信仰に真っ向から対立するイエスが邪魔でした。サドカイ人とパリサイ人は、与党と野党ですから、普段は仲が良くなかったのです。しかし、ここで「イエスが邪魔だ」ということで利害が一致しました。

大祭司カヤパは「あなたがたは全然何もわかっていない。ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない」(50)と言います。「国民全体が減びないほうが」と、国民のことを考えているようなことを言いますが、要は自分にとって都合が悪いということです。彼らは、神の民の指導者として立てられていた人達です。メシア(救い主)を待ち望んでいた人々です。なぜ救い主として来られたイエスを認めることが出来ず、殺すことを決めたのか。ある神学者は言っています。「彼らが聖書を読んでいなかったからだ」。祭司は宗教の専門家です。聖書(旧約聖書)も読んでいたはず。それでも「聖書を読んでいなかった」とは、どういうことでしょうか。

彼らは、自分達を救ってくれる救い主が現れるのを待っていました。救い主が現れる時、自分達は救い主をサポートして信仰の務めを果たさなければならないと思っていたのです。そのためには、ここで国が減ぼされ、ローマに蹂躪されては困るのです。そのためにもイエスは邪魔だった。その視点でしか聖書を受け止めなかったのです。その時、ラザロをよみがえらせ、人々に神の愛を語り、貧しい者に福音を宣べ伝え、痛めつけられている者に慰めを語り、罪人を一緒に食事をする、そういう聖書の語る救い主の香りを放っておられるイエスの中に、救い主の姿を見ることが出来なかったのです。彼らは「それが神の御心に適っていることか、どうか」ということで判断したのではない。「自分にとって都合が良いか、悪いか」、「自分の願う通りか、どうか」、そういう基準で救い主を判断したのです。その結果、信仰のリーダー達が神の子を十字架に架けて行くのです。ここに、彼らの恐ろしい罪があります。神の御心を無視して、結果的に彼らは、神に敵対してしまうのです。

しかし良く考えると、「自分にとって都合が良いか、悪いか、自分の思う通りか、どうか」ということで物事を見、判断して行くのは、彼らだけのことではないと思います。私達の中にも、何でも自分を中心に置いて、「これは、こうあるべき」「神は、私をこう救うべき、こう助けるべき」、そのような立ち位置で、物事を考えて行く面があるのではないのでしょうか。そして、自分に都合が悪いと言っては、ブツブツ言っている時があるのではないのでしょうか。彼らと相通じる罪を、私達も持っているのではないのでしょうか。もしそうなら、私達は彼らの姿を反面教師にして、祝福の信仰生活に軌道修正する必要があるのではないのでしょうか。

私達にも、自分の願う救いがあります。祝福があります。そして、それを神に押し付けようとしています。私もそうです。そしてその時、もっと大切な救いを、あたかもあまり意味のないものであるかのように無視してしまうのです。しかし、神の下さる救いの祝福は、何よりも「罪の赦し(贖い)」による「永遠の命」という祝福です。「ディリー・ブレッド」にこんな記事がありました。「『神は長いこと私のために

は何もして下さらない』と感じる時が誰にでもあります。神は他の人のためには色々されているのに、私の人生には超自然的なことがほとんど起こらないと。私達はふてくされて、『神はどこかで働いておられるだろうが、私の人生には働かれない』と勝手に思っています。しかし改めて考えれば、もし神が罪から贖う以外には何もして下さらなかったとしても、私達は身に余るものを受けています。罪の贖いだけでも、残りの人生を神の栄光のためにささげる十分な理由です。「罪の赦し(贖い)」の祝福を与えること、そのためにこそイエスは来られたことを、私達は再確認する必要があると思います。そして私達は、K 姉の召天を通して、「罪の赦し」「永遠の命」の祝福がどんなに大きな、そして決定的な、そして永遠の祝福であるか、そのことを教えてもらったのではないのでしょうか。

この個所によって、人間的な面では、イエス様の死刑が公に決まってしまう。もちろん、その裏には、イエス御自身が進んで死んで行かれたという面があるのですが…。しかしいずれにしても、イエスは死なれるのです。十字架に架かれるのです。何のためでしょうか。繰り返しますが、私達が永遠の滅びから救われるためです。それが、神の救いの一番の祝福です。そして、それを私達にもたらす救い主こそ、旧約の預言書が預言している救い主の姿です。

彼らも、その神の御心に砕かれるところに、真の救いがあったのです。私達の信仰生活も同じだと思います。自分の我を通そうとする頑なさを砕かれて、何より私達の永遠の命の救いのためにイエスが死なれたこと、そのことを確認し、イエスの死によって今既に永遠の命を生きていること、その大きな恵みを受け止め、神の前に遡り、感謝すること、そこに、私達の平安と祝福のカギがあるのではないのでしょうか。

その意味で、イエス様が私の罪のために死んで下さったということ、何度でも思い返し、イエス様の十字架の死を自分のこととして受け止めることが大切です。指導者達が、その信仰生活において、もっとも疎かったのは、罪を認めること、悔い改めることです。神の赦しを願い、受け取る姿勢です。「アルファ・コース」のニッキー・ガンバル先生が次のようなことを言っています。「なぜ、人々は『私には神は要らない』と言うのか。それは、人々が『自分は神がいなくても結構幸せだ』と思っているからだ。しかし、問題は、『幸せか、どうか』ということではなく『赦しを受け取るか、どうか』ということだ。しかし、人間のプライドが『赦される』ということを許さない。『自分は赦される必要はない』と勝手に思ってしまう」。もし、私達が自分の罪性を認めなければ、私達は神に赦される必要はありません。「なぜ、私が赦してもらわなければならないのか」ということになります。しかし、最後の晩餐でイエス様がペテロの足を洗おうとした時、ペテロは「洗わないで下さい」と言いましたが、イエス様は「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしとは何のかかわりもないことになる」(ヨハネ 13:8)と言われたのです。ペテロとイエス様の関係、それは、イエス様がペテロの罪を洗って下さるという1点に懸かっていたのです。十字架の前と後の弟子達は、別人のように変えられます。もちろん「主の復活」が彼を変えました。しかし、それだけではない。十字架の前と後の弟子達の違いは何かというと、彼らは「私はいざとなったら、自分の都合のためにイエス様を裏切った」という事実を通して「私はイエス様に足を洗ってもらわなければならない、主の赦しを必要とする者なのだ」ということを握っているかどうか、いや「私はイエス様に赦してもらった者だ」ということを握っているかどうか、そこが彼らを

全く変える一番のポイントだと思います。私達が自分を見て「いかに自分の都合でしかものを考えられないか、いかに隣人愛に遠いか」、そういうことを認めた時、主の十字架、神の赦しというものが、途方もなく有り難いものになるのです。有り難いものになるだけではない、パウロが「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んで下さったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマ 5:8)と言った、その神の愛が私達に迫って来るのです。

罪深い私達が罪赦され、永遠の命の祝福を得ることが出来るように、イエス様が死んで下さったこと、そこに救いの祝福の原点があること、それを何度も確認したいと思います。

2 : 神の支配に目を向ける

カヤパは「ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが…得策だ」と言いました。ヨハネは解説して「ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである」(ヨハネ 11:51~52)と言います。ヨハネは何を言いたかったのでしょうか。

まず疑問に思うのは、この話し合いは、祭司とパリサイ人の間で行われたものです。なぜ、その話し合いの内容を、ヨハネが知っているのでしょうか。「使徒行伝」の中に次のような言葉があります。「…エルサレムで弟子の数は非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入っていた」(使徒 6:7)。「パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり…」(使徒 15:5)。イエス様の十字架と復活の後、祭司の中から、またパリサイ人の中からイエス様を信じる人々が起こされます。彼らは、なぜイエス様を信じたのでしょうか。もちろん、弟子達の命がけの宣教があったでしょう。しかし、いみじくもカヤパを通して語られた「国民全体のためにイエス様が死ぬ」というこの言葉が、彼らが十字架の意味を受け止めて行くのに大きな助けになったのではないのでしょうか。だから、彼らがやがて信仰に入ってきた時、「実は、カヤパがこんなことを言ったんだ」ということを、ヨハネに教えたのではないのでしょうか。ヨハネは、それを聞いて「神は、イエス様を信じる人々を通して働かれるだけではない、イエス様の十字架の恵みに最もふさわしくないような人の口を通して語られ、イエス様に敵対する人々の中に、やがて信仰に入る人たちを既に用意しておられた」ということを感じたのではないのでしょうか。そして彼は「神は、カヤパのように神に敵対して、神の子を滅ぼしてしまおうとする者の口さえも用いることが出来る方である。神の支配の下にない所はない。神は、一切のことを支配しておられる」ということを感じて、この記述を加えたのではないのでしょうか。

パリサイ人、サドカイ人は、自分達の力で歴史の流れを動かせると思いました。歴史の支配者である神を無視して、イエス様を殺せば上手く行くと思いました。しかし、ヨハネが教えてくれることは、人の思いの全てを越えて、歴史を支配しておられるのは神である、ということではないのでしょうか。先程も申し上げたように、私達も目の前の状況を見ます。そして、自分に起こって来る状況に一喜一憂して、心揺さぶられ、振り回されます。しかし私達は、私達の見えるところを越えて、神が働かれるということ、私達にとって厳しい、辛い現実でさえも、神の御手の中にあるということ、神の御手の届かないと

ころはないということ、そのことをしっかり自分の中に確認すべきではないでしょうか。そして、その神の支配に信頼して、また神の計画の中で私達それぞれに与えて下さる信仰の歩みを感謝して受け取ることが大切ではないでしょうか。

もちろん「神がおられるなら、なぜこんなことが…」ということがあります。私達の人生にも起こって来るし、私達の周りにも起こって来ます。少し話が大きくなってしまっただろうかと思うのですが、私が神学校で勉強する中で、どうしてもこの疑問に納得出来るものが欲しいと思ったことがありました。それは第二次大戦中のナチによるユダヤ人大量虐殺の事実をどう考えるか、ということです。もちろん、神がなされたわけではありません。人間の悪がやったことです。しかし、歴史を神が支配しておられるということを知るために、どうしても納得がしたいと思いました。私は神学校の先生に「本当に神が歴史を支配しておられるのなら、どうしてあんなことを許されたのですか」と聞きました。神学校の先生は、誠実に「私にも分かりません。しかし、ヨーロッパには長い長いユダヤ人迫害の歴史があったけれど、あの事件の後、もうユダヤ人を迫害してはいけないのだ、という共通の意識がヨーロッパの人々の心を支配するようになったのです」と言われました。またご承知の通り、あの事件が1948年のユダヤ人国家イスラエルの建国、そして国連がイスラエルを承認して行くという、その後の歴史の伏線になって行きます。私はそれで全てが納得出来た訳ではありませんでしたが、『神の支配』というところに立って良いのだ」という思いを持ちました。

神が全てを支配しておられるなら、神は私達をも、私達の生涯をも、その御手の中に包んで、私達に責任を持つようとしておられるはずです。私達には、色々なことがやって来ます。喜ばないこともあります。その中で揺さぶられたり、投げやりになったりします。しかし、そんな時こそ、神が私達の全てを支配しておられ、私達の全てに責任を持ち、その御手の中で持ち運ぼうとしておられるということに目を向けて行かなければならないのではないかと思います。そして、その神のご支配の前に謙らなければならないのではないかと思います。私達は、偶然の中に生きている訳ではありません。神が世界を支配しておられ、その中で、私達をご自分の祝福の計画に従って持ち運ぼうとしておられることに信頼して行く者でありたいと思います。

3：終わりに

今日、2つのことを話しました。「神の救いの原点に帰る信仰」、「神の支配に信頼する信仰」、この信仰の視点を持って、新しい週を信仰の歩みをして行きましょう。